

令和5年度学校総合評価

6 今年度の重点目標に対する総合評価

本校生徒は礼儀正しく、意欲を持って何事にも真摯に取り組むが、一方でさらなる自主性、主体性が望まれる状況にある。そこで、生徒が自分の能力・適性等を的確に把握し、高い目標を掲げ、意欲的に学習活動や学校生活に取り組むことを促す取り組みを継続している。

重点項目「学習活動」では今年度新たに「自学・自楽する18歳へと、学びと成長のウェルビーイングの達成」を重点課題として設定した。前年度の課題と授業力向上・家庭学習の充実という点では共通するものがあるが、主体性を育む授業の実施と、授業を活かす生徒のマインドセットの確立を目指した。また「自主的な学習」について学びと成長のウェルビーイングの達成を目指し方策を立てた。保護者や学校関係者から、本校生徒は自主的な学習する習慣を高校で自然と身に付けていることを評価された。調査の方法についても前年度から大きく変化させたが、さらに工夫が必要であるとの指摘を受けた。

重点項目「学校生活」では2個の重点課題を設定した。重点課題「基本的再成人年齢と生活習慣の改善」ではスマートフォンの使用時間短縮とSNSでの個人情報の正しい取り扱い、および成人年齢の理解を目標とした。おおむね目標は達成したが、スマートフォンの使用時間は増加傾向にある。重点課題「健康的な環境づくりに努める知識や能力の向上」では清掃の意義を理解し意欲を向上させることを目標とした。結果はほぼ達成され、学校薬剤師からも清掃により学校内の環境が向上しているとの評価があった。

重点項目「進路支援」では「生徒一人ひとりの適性や能力を引き出す学習・進路指導」を重点課題として、自ら学ぶ集団作りと進路目標の設定を目指した。早い時期から進路選択ができる情報提供の仕組みについては良い評価をされたが、目標には若干届かなかつた。継続した取り組みが必要である。

重点項目「特別活動の充実」では「学校行事への主体的取り組み及び生徒の積極的な参加を促すための生徒会規約の改定」を重点課題とし、行事への主体的な参加と満足感、生徒会の規約改定を目指した。今年度も生徒主体の行事運営はより進み、定着の方向にある。職員・保護者・学校関係者ともに高い評価をしている。

重点項目「探究活動の充実」では「探究活動の深化」を重点課題とした。本校の探究科学科には理数科以来の課題研究のノウハウがある。昨年度からSTEAM教育の研究開発校となり、普通科の総合的な探究の時間においても探究活動を深めている。多くの生徒が主体的な学びができている結果となった。

7 次年度へ向けての課題と方策

今年度の取り組みから、様々な課題への方策について教員間のより深い共通理解の必要性が判明した。

主体的・自主的な学習への取り組み、スマホ使用時間の増加、課題提出率の低下については単一の理由だけではないことが指摘された。分掌間の協力・連携と調査方法の工夫が必要であると思われる。

普通科の総合的な探究の時間の取り扱いについては2年間の取り組みにより問題点も把握できた。令和6年度入学生から1年1単位、2年2単位で実施することとなっている。

8 学校アクションプラン

令和5年度 富山高等学校アクションプラン -1-

重点項目	学習活動	
重点課題	「自学・自楽する18歳へ」と、学びと成長のウェルビーイングの達成	
現状	<p>本校では、「発展的将来に貢献する人間の育成」を目指し、進路実現と、卒業後のさらなる飛躍の土台となる資質能力の育成につながる教育を展開している。その中でも、学習活動の両輪は、授業と、授業外の「自主的な学習」である。</p> <p>「授業」に関しては、10年以上にわたり「学び合い」「ICT活用」など、手法や授業展開の工夫に重点を置いて取り組み、成果をあげてきた。今後はさらに、生徒自身がその授業に「受け手」ではなく「学びの創造者」としてのマインドセットをもって臨むことができるか、それをいかに促すことができるかを重点課題とし、生徒の一層の能力伸長につなげたい。</p> <p>「自主的な学習」に関しては、授業の効果を高め、内容が定着するような取り組みが十分になされていることの指標の1つとして、週28～34時間程度の時数が学年ごとに設定している。学習量が少ない生徒に対しては、面談による声かけなどを行ってきた。その効果が一過性に終わらず、自発性の高まりによって継続するような指導を工夫する必要がある。</p>	
達成目標	<p>1 「授業」について 主体性を育む授業の実施と、授業を活かす生徒のマインドセットの確立 ①生徒による授業参加の自己評価 「学び合い」や「教え合い」、「振り返り」などの活動を自分自身の学びの場として活かすことができた生徒の割合が100%となること。 ②授業に関わる事前/事後課題への取り組み その授業を効果的に受講するために課された課題への取り組みが100%となること。</p> <p>1、2ともに、9月、1月に実施する学習生活実態調査時に生徒アンケートを実施する。各項目が、3年後に100%となることを目指す。</p>	<p>2 「自主的な学習」について 学びと成長のウェルビーイングの達成 ①自分自身の成長の実感 日ごろの自主的な学習活動の結果、自分の思考力・判断力・表現力が向上したと実感した生徒の割合が100%となること。 ②持続可能性 日ごろの自らの学習活動が、高校の3年間にわたって持続可能なものとなっていると感じている生徒の割合が100%となること。 ③多様性 日ごろの学習活動が、自分自身やその目標に適合したものであると感じている生徒の割合が100%となること。</p>
方策	<p>1 進路指導部との連携 進路指導部学習指導係と担任・教科担当者との連携によって、生徒が家庭学習に主体的に取り組める適正な課題の質および量を設定し、細かく調整するようにする。その際には授業と学習課題の有機的な結びつきを高めるとともに、実態としての個別最適化が実現されるように工夫する。</p> <p>2 面接指導の充実 面接週間を7回設定する。学習時間の確保に困難を感じている生徒や学習効率に工夫が必要な生徒に対しては、ウェルビーイングの観点①～③の実態の把握と共有を出発点にしながら、対話的に指導を行う。</p> <p>3 授業におけるImprovisation (即興)の促進 教員の「授業構想」を基本としながら、随時、生徒間、生徒教師間の対話的な学びを促進する。</p> <p>4 働き方改革の推進 教務規定や成績評価の業務の見直しを通して、教員自身が「自学・自楽」し、ウェルビーイングを体現する生き方、学び方の価値観を再構築する時間を創出する。</p>	
達成度	<p>1月に実施した生徒アンケートの結果。4段階評価のうち、高評価の上位1回答と、上位2回答の割合。()内は9月時点アンケートからの変化</p> <p>1 「授業」について ①授業参加の自己評価 「とてもできた」、 「とてもできた+できた」 1学年 23.2% (-5.3%)、 93.0% (+2.5%) 2学年 21.5% (-1.9%)、 85.9% (-1.2%) ②授業に関わる事前/事後課題への取り組み 「とてもできた」、 「とてもできた+できた」 1学年 16.2% (+3.2%)、 74.6% (+15.7%) 2学年 17.2% (-7.3%)、 82.0% (-1.4%)</p>	<p>2 「自主的な学習」について ①自分自身の成長の実感 「ある」、 「ある+どちらかといえばある」 1学年 22.8% (+2.0%)、 82.0% (+3.7%) 2学年 16.0% (+1.1%)、 76.2% (+6.7%) ②持続可能性 「そう思う」、 「そう思う+どちらかといえばそう思う」 1学年 36.8% (+5.2%)、 87.3% (+14.1%) 2学年 22.7% (-4.5%)、 82.0% (-1.3%) ③多様性 「なっている」、 「なっている+どちらかといえばなっている」 1学年 27.2% (+8.1%)、 77.6% (+9.7%) 2学年 14.5% (-4.5%)、 73.0% (+1.4%)</p>
具体的な取組状況	<p>方策1から3については、共有、啓発の取り組みが十分ではなかった面もある。その中でも、方策1については、各学年の学習係が中心となり、一律課題については精選し、選択課題を提示する方向を模索した。また、方策2について、面談の際には、それぞれの習熟度に応じて、どの課題に優先して取り組むと良いか、などの助言を対話的に行うなどの取り組みがなされた。</p> <p>方策4について、教務規程、成績評価の業務の見直しを行い、新教育課程における評価が合理的に行われ、それに関わる業務が効率的に行われるよう環境整備を行った。</p>	
評価	B 生徒と教員の双方からのアプローチの端緒となった。	B 教員自身が学びにおける「生徒の憧れ」にあることが必要
学校関係者の意見	<p>・アンケートについて、問い方が漠然としている。否定的な生徒については理由を問う記述の欄があればよい。</p> <p>・互いに切磋琢磨して成長することができる学校であると実感した。</p> <p>・保護者から見ると、生徒は自主的な学習する習慣をこの高校で自然と身につけている。</p>	
次年度へ向けての課題	<p>今回調査した5項目と、模試成績等には、強い相関は見られなかった。このことは、今回のような課題設定が不相当であることを意味するのではなく、模試成績だけでは、生徒の学習の実態を捉え切れていないことと見るべきであろう。そもそも「学び」が持つ効果としては、次の進路への権利を得るという面だけではなく、本人が将来にわたって活用する資質能力を高める側面、そして、生徒の今の人生を充実させる側面がある。その3つのいずれかに偏重することなく学習指導を進めていく必要性が増していると思われる。</p> <p>今年度は実態把握の手法を試行した面が強かった。今回の結果を職員間で共有し、本校のスクールポリシーとの関連も考慮しながら、非認知能力を含めた評価と指導の在り方を模索していきたい。</p>	

(評価基準 A:達成した B:ほぼ達成した C:現状維持 D:現状より悪くなった)

令和5年度 富山高等学校アクションプラン-2-

重点項目	学校生活	
重点課題	基本的な生活習慣の改善	健康的な環境づくりに努める知識や能力の向上
現 状	<p>本校では『生活あつての学習』を掲げ、規則正しい生活習慣の確立をめざしている。しかし、スマートフォン等を長時間使用し、学習に支障をきたす生徒も見受けられる。また、スマートフォンの利用時間は、最近数年は増加の傾向にある。</p> <p>また、昨年の4月から18才を成人年齢とする法律が施行され、法的には親の承諾なく売買等の契約や、婚姻等の届が出来るようになったが、そうした18才をターゲットにした犯罪の危険性もしてきされている。しかし、成人としての自覚や責任をまだ意識していない3年生が多い。</p>	<p>日常の清掃及び月例大掃除の指導を通して、環境を整えることの意義や協力の大切さ、効率的な時間の使い方等を理解させたいが、以下のような課題がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業終了後、一斉に清掃し、早く放課後課外活動を始めよう、という意識が薄い。 ・漫然と清掃し、協力して手際よく行おうという工夫が不足している。 ・清掃の意義を理解し、主体的に取り組む姿勢に乏しい。
達成目標	<p>1 スマートフォンの、学習活動・生徒間連絡利用以外の使用時間短縮 学習活動や生徒間の連絡以外の目的でスマートフォン使用している時間が1日2時間以内である生徒割合が70%以上。</p> <p>2 個人情報のSNSへの安易な書き込みの防止 ネットパトロール等外部から指摘を受けるような他人の個人情報掲載、著作権違反、他への中傷記載などなくす。</p> <p>3 主体的に18才を成人年齢とする法律の要点を理解する態度の涵養 18才を成人年齢とする法律を学ぼう(理解しよう)とした3年生の割合が80%以上。</p>	<p>4 校内清掃の大切さと、清掃が生活向上につながることを認識できる生徒の割合を9割以上にする。</p>
方 策	<p>1 スマートフォンは学習活動・生徒間連絡に不可欠なものとなりつつあるが、生徒に対して講演会を実施するほか、教員・保護者が連携して生徒の現状把握に努め、使用時間を控えさせる。</p> <p>2 個人情報の安易な開示・書き込みなどについての危険性について生徒の意識向上を図る。</p> <p>3 法律によって改められる権利と義務を、さまざまな機会を通じて啓蒙する。</p>	<p>4 月例大掃除の実施方法を改善し、清掃の取り組み意欲を向上させる。</p> <p>5 アンケート調査により、生徒の清掃に対する意識変化をみる。</p>
達成度	<p>1 学習活動以外でのスマートフォン使用時間が1日2時間以内である生徒の割合 1年…81% 2年…83% 計…85%</p> <p>2 ネットパトロール等外部機関からの指摘 0件</p> <p>3 18歳成人の法律を学ぼうとする3年生の割合 84%</p>	<p>4 今年度の清掃活動を通して年度当初より今の自分は清掃の大切さと清掃が生活向上につながると思うようになった割合 1年…95% 2年…81% 計…88%</p>
具体的な取組状況	<p>新入生保護者に対しては、入学式後の保護者会説明会で注意を呼び掛けた。新入生に対しては警察の方を講師に招き、SNS安全教室を開催した。</p> <p>また、全校集会や学年集会等で注意を呼びかけ、意識の高揚を促した。</p>	<p>月例大掃除の実施方法を変更し環境整備委員会を中心に活動をしたり、活動時間帯を知らせるための放送をかけた。また、オープンハイスクール前にボランティア清掃の呼びかけをし環境整備への意識向上を図った。</p>
評 価	<p>B</p> <p>①スマホの1日の使用時間は、2時間を超える生徒はかなりの数と思われる。今回は学習利用を省いたら目標値を達成できたが、今後も実態の把握に努める必要がある。</p> <p>②個人情報の書き込みの危険性は、生徒に浸透しつつあると思われる。</p> <p>③18歳で成人となり、自分がその立場に該当するので、3年生の生徒の関心は高い。特に「選挙権」「売買契約」への関心が高い。</p>	<p>B</p> <p>④ほとんどの生徒が清掃活動の大切さを意識でき、それにより生活の向上につながっていると感じている。より自主的な清掃活動につながる工夫の必要がある。</p>
学校関係者の意見	<ul style="list-style-type: none"> ・スマートフォン2h以内は当たり前を思う。 ・18歳成人による変化をより周知させる必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・検査の結果はよくなっている。継続してほしい。 ・上級生の取組が新入生に伝わるようになれば良い。
次年度へ向けての課題	<p>①今回スマホの学習利用を省いたら目標値を達成できた。しかし、トータルの使用時間は年々増加している傾向にあり、やめたくてもやめられないとの声も聞かれるので、対応を考えてみたい。</p> <p>②外部からの指摘はなかった。しかし、個人情報書き込みの危険性を、常に啓発する必要がある。</p> <p>③18歳で成人となり、自分がその立場に該当するので、3年生の生徒の関心は高い。特に「選挙権」「売買契約」への関心が高い。</p>	<p>1・2年生の合計では達成目標の9割には届かなかったが、1年生は95%が清掃の大切さを自覚できた。来年度以降も継続して清掃活動の啓蒙活動を実施し、新入生が清掃の大切さを自覚でき、在校生もその意識を維持できるようにする。</p>

(評価基準 A:達成した B:ほぼ達成した C:現状維持)

#NAME?

令和5年度 富山高等学校アクションプラン -3-

重点項目	進路支援	
重点課題	生徒一人ひとりの適性や能力を引き出す学習・進路指導	
現 状	<p>1 本校では、週間課題を生徒に課しているが、自らの進路意識が薄く課題に対し「やらされている感」を持っている生徒が年々増加しており、課題提出率が低くなってきている。</p> <p>2 本校では、生徒の進路意識の向上と学習意欲の喚起を目的に、折に触れて様々な進路行事を開催している。さらに外部講師を招き、1・2・3学年とも進路講演会を行っている。これらによってモチベーションを高める生徒がいる一方で、進路意識が高まらない生徒も散見される。</p>	
達成目標	<p>1 「自ら学ぶ集団」を作る進路指導の実現</p> <ul style="list-style-type: none"> ・課題の量・取り組み方の指導について教員側が工夫をこらし、生徒が自主的に取り組めるようにする。進路実現のために自ら課題に取り組む生徒の割合80%以上。 	<p>2 進路目標(志望校)の設定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各種進路行事・外部講師を招いての進路講演会を通じて目的意識を持って学習に取り組むようになった生徒の割合80%以上。 ・目標とすべき志望校が、第2学年が終了するまでには決定している。
方 策	<p>1 教員側が各教科の指導において、いつどのような課題を与えてどんな力をつけるかを工夫し、生徒によく理解させ、自主的に課題に取り組ませる。</p> <p>2 学年集会や面談等を利用し、進路を考える機会とする。</p> <p>3 高い進路目標を持つ集団を、補講や大学志望別集会などを通じて早期に形成させ、お互いに切磋琢磨できる環境を学校生活のさまざまな場面で育成するように努める。</p> <p>4 学習支援講座や講演会、「進路のしおり」等を通して、生徒にとって必要かつ有意義な情報の提供ができるように努める。</p> <p>5 社会人や大学生を招いたキャリア教育により、主体的に「学びに向かう力」を育むことができるように支援する。</p>	
達成度	<p>1について</p> <p>アンケートは1学年78.2%、2学年73.0%であった。課題の量・取り組み方の指導については、課題の意味に関して教職員間での共通意識を確認することから始める必要があり、継続して取り組む必要がある。職員全員参加の学習指導委員会や学年懇談会、各教科部会や学年会で話題にして、自学できる集団を作っていきたい。</p>	<p>2について</p> <p>アンケート結果は1学年69.9%、2学年73.0%であった。進路行事としては、1学年は文理選択について、2学年は外国語学習についてと変化する共通テストについて、3学年は夏休み前に入試本番に向けて外部講師を迎えて進路講演会を行った。</p>
具体的な取組状況	<p>週間課題について、共通意識の確認を進路指導部会や学習指導委員会で確認しているところである。各教科で縦の指導を責任をもって行いたい。</p>	<p>各種進路行事や講演会を行うにあたり、学年と外部講師の間で目的や強調してほしいことなど、前もってすりあわせるようにした。</p>
評 価	B 今年度のアンケート結果は80%に達しなかったが、継続して努力していきたい。	
学校関係者の意見	<ul style="list-style-type: none"> ・課題提出率の低下について、進路意識はあるが生活が原因の生徒もいるのではないかと。 ・早い時期から進路選択ができるような取り組みが設けられている。 ・高みを目指すだけでなく興味関心のある志望校設定が望ましい。 	
次年度へ向けての課題	<p>今年度の取り組みは次年度も継続して行いたい。週間課題についての教員側の共通理解が求められる。各教科、いつ、どのような課題を与えて、どんな力をつけさせるのか、教科全員・学校全体で取り組んでいきたい。</p>	<p>進路講演会等の際、学校側の思いと外部講師の方々の思いをすりあわせることが必要不可欠である。</p>

(評価基準 A:達成した B:ほぼ達成した C:現状維持 D:現状より悪くなった)

令和5年度 富山高等学校アクションプラン-4-

重点項目	特別活動の充実	
重点課題	学校行事への主体的な取り組み及び全校生徒の積極的な参加を促す為の生徒会規約の改定	
現 状	<p>学校行事は生徒の主体的活動を促し、実生活における思考力、表現力、判断力の礎となる重要なものである。さらに主体的な学びを促進する重要な機会でもある。本校では生徒と教職員が協力して生徒会や実行委員会で諸行事を運営している。</p> <p>ただし生徒たちの主体的な活動とはいえ、実際の活動は基本的に前年度を踏襲する、もしくは前年度のマイナーチェンジというのが現状だった。ところがコロナ禍による行事の中止、縮小が相次ぐ中、生徒たちは想像し工夫しながら行事の開催にたどり着くという、真の意味での主体的な活動になりつつある。</p> <p>だがまたその一方で一部の生徒たちだけで企画運営し、教師や他の生徒に活動の状況が伝わらないという現象も見えてきている。</p> <p>生徒会や実行委員会の活動を「見える化」し生徒全員が企画・運営に参加する学校行事にしていきたい。</p>	
達成目標	1 本校の二大学校行事(体育大会、文化活動発表会)に自ら協力できたと感じる生徒が80%以上。 充実していたと感じる生徒が85%以上。	2 生徒会の規約を見直し、全校集会(生徒総会)などが開催できるシステムを構築する。
方 策	<p>1 年間における特活行事の時期・目的・内容等の検討を行う。</p> <p>2 主な学校行事(体育大会、文化活動発表会、)に対して以下の項目を中心にアンケートを実施する。</p> <p>①準備や運営に自ら協力できたか。②この行事は充実していたか。③その他意見</p> <p>3 生徒会の規約を時代に沿った内容に、生徒と教員が話し合いながら改正を進める。</p>	
達成度	<p>新型コロナの5類移行に伴い、行事はほぼコロナ以前の形態に戻すことができた。</p> <p>しかし地球温暖化による熱中症対策という問題が生じており、今後一層の対応必要に迫られている。</p> <p>アンケート結果は以下の通り。</p> <p>体育大会の内容に満足 85.2%</p> <p>体育大会の運営は 生徒中心に感じた 85.6%</p> <p>生徒と教師が協力していた 20.6%</p> <p>文化活動発表会の内容に満足 82.7%</p> <p>文化活動の運営は 生徒中心に感じた 72.0%</p> <p>生徒と教師が協力していた 30.1%</p> <p>となった。</p>	<p>ようやく生徒会会則の見直しを実施できた。生徒会執行部、担当部署の部長、管理職の話し合いの場(名称未定)も定着してきており、今後保護者も参加する形態に拡大する予定である。</p>
具体的な取組状況	<p>生徒中心の活動は定着してきている。しかし諸行事の見直しについては、今後実施予定の行事の見直しに関する小委員会にて議論を続けたい。</p>	<p>保護者との話し合いの場は今年度中に持つ予定である。その中で制服の見直し(LGBTQ対応)や着用の運用についても議論を進めている最中である。</p>
評 価	A	<p>新型コロナによる行事の見直しや縮小の影響で、本来の行事の姿を知らない生徒が中心となって活動する中、良く工夫し、また新しい行事のあり方を模索することができた。</p>
学校関係者の意見	<ul style="list-style-type: none"> ・教員と生徒会執行部間の意思疎通のため、職員会議でまとめがあればよい。 ・生徒が主体的に取り組む姿に今後も期待している。 ・体育大会、文化活動発表会はともに素晴らしい活動であった。 ・生徒会が学校をよりよくするために活動していることがよく伝わった。 ・規約は時代に合わせて見直すべきもので賛同する。 	
次年度へ向けての課題	<p>生徒主体が進む中で、教員と生徒会執行部間の意思疎通が希釈になってきている。これは執行部担当教員が諸問題を一手に引き受けることに起因する。</p> <p>多くの教員が早い段階で関わりを持つことのできるようなシステムの構築と運用が必要である。</p> <p>また体育大会の実施時期に関しては生徒の身体的な安全とその教育的効果について、丁寧に説明を進めたい。</p>	<p>生徒会執行部によるSNSによる富山高校の魅力発信の希望があるが、個人情報保護という高いハードルがある。他校の取り組みなどを参考に実施の可否も含めて議論していきたい。</p>

(評価基準 A:達成した B:ほぼ達成した C:現状維持 D:現状より悪くなった)

令和5年度 富山高等学校アクションプラン-5-

重点項目	探究活動の充実	
重点課題	探究的学習の深化	
現 状	めまぐるしく変化する現代社会において、「既存知」が豊富であるだけでなく「未来知」を創造できる高い資質能力が求められつつある。その育成のためには、何が「課題」であるかを考え他者と「協働」して「解決」していくことや、知識や情報を再構成して「新たな価値」へと繋げていくことができるようになることが必要である。同時に、それらを育む効果的な教育課程が求められている。	
達成目標	探究科学科：[課題発見力・論理的思考力の育成] ※単元ごと、及びポスターセッション後の自己評価 上記の自己評価を実施し、「批判的」かつ「創造的」思考力の育成が「協働的」な学びの中で行われているか確認する。	普通科：[主体的学習態度の醸成] ※各学期末、及び成果発表会後の自己評価 上記の自己評価を実施し、実社会や実生活における諸問題に、「主体的」に「自分事」として捉え、納得解を探そうとしているか確認する。
方 策	1 「探究基礎Ⅰ」「探究基礎Ⅱ」「理数探究」の指導内容・指導方法を十分研究し、授業担当者間で共通理解と綿密な連携を計りながら実施する。 2 自ら高い目標を設定し単元ごとに主体的に自己評価を行うことの意義と、今後の学力や進路選択や人生における有用性を理解させ、探究活動への意欲を喚起する。 3 情報機器を適切に操作する技能を習得させ、情報を取捨選択し適切に扱う情報倫理や研究倫理を理解させる。 4 1年次の巡検研修や2年次の東京方面研修において、探究活動がより深められるよう計画・実施する。	1 生徒の実態に即した教科横断的で総合的な授業となるよう指導内容・指導方法を十分研究し、授業担当者間で共通理解と綿密な連携を計りながら実施する。 2 実社会にはすぐに解答や正解が得られない課題や問題が存在することを理解させ、自身の今後の生き方や在り方を思索する機会とする。 3 現在の課題に対し最適解や納得解を見いだすことの意義と、今後の学力や進路選択や人生における有用性を理解させ、探究活動の意欲を喚起する。 4 情報機器を適切に操作する技能を習得させ、データの基本的な処理方法を理解させる。
達成度	1年・2年12月「批判的」「創造的」思考力「協働的」な学びの観点をもふまえた自己評価結果。次のような思考力をもって活動できるようになったか、 段階4:とてもできるようになった。3:概ねできるようになった。2:少しできるようになった。1:できるようになっていない。>単位数 4 3 2 1 できるようになった ①批判的思考 1年生: 36.4 35.1 23.4 5.2 94.9 ①批判的思考 2年生: 30.1 60.3 7.6 0 100 ②創造的思考 1年生: 63.6 22.1 13.0 1.3 98.7 ②創造的思考 2年生: 50.0 37.8 12.2 0 100 ③協働的な学び 1年生: 42.9 32.5 18.2 6.5 93.6 ③協働的な学び 2年生: 61.3 30.7 4.0 4.7 96.0 ※昨年度と調査項目を一部変更。	①2年普通科の富山市課題に対する意識調査。(問題の当事者だと感じている生徒の割合;各課題に対する回答の平均%) R4 12月調査 62.9 % R5 7月調査 69.9 % (R4年度と70%以上の生徒が別課題に取り組む。) R6 2月調査 最も社会問題について考えた活動:富山市課題の発信物の製作71.1%(主体的に取り組んだ活動としては、「富山市課題の発信物の製作」44.6%、「文化活動発表会でのクラス発表」54.3%、「診断アプリの製作」42.9%と約半数の生徒が答えた。また、「診断アプリの製作」では、66.7%が主体的に協働的な学びを行ったと解答した。) 1年次より継続課題のため、R5の7月調査では「2年4月当初と意識の変化はない」と答えた生徒は数に含まなかった。 ②1年生普通科の富山市課題に対する意識調査。 R5 12月調査 70.7 % R6 2月 ポスターセッション後調査では、79.2%と当事者意識が高まった。
具体的な取組状況	【1年】 1学期:4～5月;「論理的思考の概念を知る」・ICT機器の操作・データサイエンス基本講座(今年度新)。6～7月;人文社会科学科は、高志の国文学館にて日本文学研究・国際交流委員による異文化理解、富山大学安江先生との地形学経済学入門の市内巡検。理数科学科は、東京大学内山先生(飛騨宇宙線研究所)による講義。スーパーカミオカンデ、KAGRA、カムランド、飛騨天文台にて1日巡検研修。 2学期:9月の文化活動発表会にて、班毎の課題研究の中間発表。12月に科内ポスターセッション発表。三校合同課題研究発表会に参加し来年度の研究の刺激を受けた。 3学期:富山大学の先生による課題研究メソッドを受講。若手外国人研究者による「サイエンスダイアログ」に参加。 【2年生】 1学期:4月より班毎に探究活動。富山大学教官による指導助言。夏休み:東京方面研修。1日目は東大研究室訪問と講義・OBOGとの懇談会。人文2日目は午前NHK放送教育センター研修、午後は財務省でのワークショップ。3日目は班毎に疑問点の解消と助言を求める。理数2日目は筑波方面研修。JAXA・ツムラ漢方記念館・理化学研究所など2コース。3日目の午前は東京大学で講義、午後は班別研修。 2学期:9月の文化活動発表会にて課題研究の中間発表。富山大学教官の助言を受けさらに検討を加える。12月の三校合同発表会でポスターセッション形式で発表。 3学期:2月に科内ポスターセッション発表会。研究集録に課題研究内容をまとめ、探究活動を終了した。	【1年】 1学期:4～5月;「論理的思考の概念を知る」・ICT機器の操作・データサイエンス基本講座(今年度新)。6～7月;文化活動発表会に向けて、身近な事象について、クラス単位で取り組んだ。 2学期:9月の文化活動発表会にて、クラス取り組み成果発表。富山市役所の協力により、5つの富山市の課題について取り組む。12月に課題別に市役所の担当者の前でプレゼンを行い、助言を頂いた。 3学期:12月の助言をもとに、自分達の課題解決案を更に具体的なものとし、2月に校内ポスターセッションで発表し、助言を頂いた。 【2年生】 2年次は1年次にあまり行われなかった、STEAM教育の内容のSTEの分野が多めに入るよう計画した。 1学期:昨年度の富山市の課題解決案を広く市中に発信する方法を考え、取り組んだ。富山大学や芸術科の教員の支援を受けパンフレットや具体的な制作物を作り、7月にクラス発表会を行った。 夏休み～9月:文化活動発表会に向けて、クラス単位で身近な事象について課題解決策に取り組んだ。英語と国語による論理的思考に関する授業を行い、その後、各自の課題を計測するアプリを作成するためのプログラミング活動を行った。個々で作業を行うため、富山大学からプログラミング指導の支援を頂いた。 3学期:2月に各自の制作したアプリのクラス発表会を行った。
評 価	B 「できない」と感じている生徒の割合を知るために、昨年度と調査方法を変更したが、「できるようになった」と答える生徒の割合にはほとんど変更が見られなかったことから、探究活動に対する生徒の達成感是非常に高く満足をしているようである。ただし、生徒の自己評価だけでなく、教員側から求めるレベルに到達したかの評価も必要と思われる。	A 昨年度からの継続で富山市課題に取り組んだ2年生においては、継続性を絶ってしまった生徒が7割となってしまったが、富山市の課題を自分事と捉える割合が増え、一応の目標を達成したと考えられる。1年生に関しては、12月のプレゼンテーション後、自分事と捉える割合が増えている。
学校関係者の意見	・探究活動ではその過程も重要である。難しいかもしれないがそれがわかるアンケートを実施できないか。 ・富山高校生は主体的な学びができていてと感じている。	
次年度へ向けての課題	探究科学科と普通科で行っている評価及び調査の中で、いくつか項目を統一すると比較も行えるため、評価基準と調査項目を再検討する。	

(評価基準 A:達成した B:ほぼ達成した C:現状維持 D:現状より悪くなった)